



Title	一切の害虫を退治せよ : 新中国の政治漫画・連環画による悪役の描き方
Author(s)	尹, 芷汐
Citation	連環画研究, 9, 2-14
Issue Date	2020-03-10
DOI	https://doi.org/10.14943/2115.98481
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/98481
Type	departmental bulletin paper
File Information	renkanga_9_2-14.pdf



一切の害虫を退治せよ ——新中国の政治漫画・連環画による悪役の描き方

尹芷汐

動物の比喻

動物を擬人化する、または人間を動物に見立てて描写する手法は、漫画の基本的な手法の一つであり、近現代の漫画史は、個性豊かで愛らしい「動物・人間融合体」のキャラクターを生み出す歴史でもある。我々はもはや孫悟空や猪八戒、トムとジェリー、ドラえもん、スヌーピーのいない世界では生きられない。しかし、今回はそうした老若男女を問わず愛されているかわいい動物キャラクターではなく、新中国の宣伝画、連環画における動物表象を取り上げてみたい。

毛沢東の「文芸講和」に基づき、社会主義リアリズムを重視する新中国の宣伝画と連環画は、基本的に工農兵階級の生活シーンを如実に写し、模範的な労働者像に沿ったリアルな人物を描写したことが多い。その一方で、政治宣伝活動において、批判すべき「悪役」はしばしば動物に見立てて描かれていた。何しろ、毛沢東も敵を動物に例える手法を愛用していたからだ。例えば文化大革命の直前に毛沢東が「資本主義者」や「修正主義者」を蠅、蟻、蚰蜒に例え、「一切の害虫を退治せよ、全無敵」¹という言葉を書いてから、「害虫を退治する」という表現は文革中の政治宣伝画にも頻繁に現れるようになった。ほかに、「牛鬼蛇神」（牛や蛇の頭をかぶった化け物）や「資本主義の走狗」（資本主義の番犬）などもよく見られる表現であった。

本誌の既刊号に掲載されている瀧下彩子と南雲大悟の論考において、すでに多くの事例が言及されているが、そうした先行研究を踏まえた上で、適宜情報を補足しながら、新中国の宣伝画と連環画における動物の比喻を概観したい²。

1950年代の宣伝画

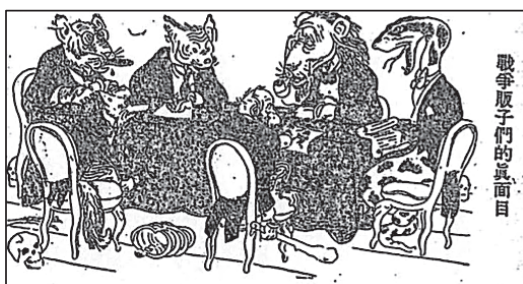
華君武の風刺漫画を網羅的に紹介した瀧下 2018 は、華君武がしばしば動物化・物質化の手法を通して、成語やことわざなどのように、政治的思想を読者にわかりやすく伝えたことを述べている³。事例として、『華君武漫画選』（人民美術出版社、1957年）に収録された一枚の風刺漫画が挙げられている。アメリカを象徴する猿が、「アイゼンハワー主義」や「トルーマン主義」「マーシャル計画」などを意味する面を変えながら芸を演じる場面だが、アメリカが様々な手段でアジアを植民地化しようとしたことを示唆するものである。また、瀧下 2017 では、1950年から1951年にかけて刊行さ

れた『宣伝画参考資料』を詳しく分析しており、「戦争屋たちの真面目」と題した一枚を挙げている（図1）⁴。ライオン、豹、虎、狼、猿、蛇が、アジアを支配するための戦争を企てる様子を表現したものである。この絵は『宣伝画参考資料』の第四輯に収録されており、おそらく編者の方成と鐘霊による作品と考えられる⁵。それぞれの動物がどの国を指すかは記されていないが、同じ見開きのページでは、イギリスはライオンの姿で、アメリカは虎、蛇、鰐、馬の姿で描かれている（図2）。つまり、この一枚の主演として大きく存在感を見せている虎と蛇はやはりアメリカで、ライオンはイギリスであろう。それに対して、やや小さめで、背中を丸めて大人しく蛇の言葉を聞いている猿と狼は、吉田茂（日本）と李承晩（韓国）を指していると推察できる。

図2には、杖で身体を支える「マーシャル・プラン」の馬も描かれている。マーシャル・プランとは戦後アメリカが西欧諸国に対して経済的援助を行うことによって、アメリカと西欧の連携を深めようとした外交政策だったが、共産主義世界と対抗する意図もあったため、中国では強く批判されてきた。馬はマーシャルという名前の中国語訳「馬歇爾」を踏まえているが、このように人間の氏名に動物を指す漢字が含まれる場合、その動物を使って当人を風刺する方法もよく見られる。また、中央下で唾を吐き散らしながら熱弁している鷹は、中国の朝鮮戦争への介入を問題視し、1951年の国連大会で中国の「侵略」を訴えたアメリカの外交官、オースティンを表している。

図1（左）ライオン＝イギリスはパイプ、虎＝アメリカは葉巻を咥える。猿＝日本のイメージは、日本猿に由来するのだろうか。

図2（右）ライオンと自負する英帝国主義者は満身創痍で痩せこけている。「米帝は紙の虎」は毛沢東が度々アメリカを罵倒するために用いたセリフだが、ここでは剪纸（切り絵）の模様を使って「紙」であることを示している。鰐と蛇、虎の大きく開いた口は、「声の大きいこと」と「貪欲であること」の両方の意味が込められていると思われる。



新中国において、動物のイメージを使用した政治宣伝画をこれほど多く集めた書物は、現段階で確認できたものに限っていえば『宣伝画参考資料』第四輯が最初である。ただし、『宣伝画参考資料』第三輯にも、ベルギー国王レオポルド三世を豚の姿に見立てて描いた一枚が掲載されている（図3）。



図3（左）「ベルギー国王レオポルドの今昔」。1940年に鉤十字の靴底を舐める豚は、十年後にドルの靴底を舐める。第二次世界大戦の最中にレオポルド三世がドイツへの降伏を選んだことと、ベルギーが1949年に締結されたNATO（北大西洋条約機構）に加入し、アメリカ合衆国へ服従したことを諷刺したものである。

図4（右）「米帝資本家の面貌」は肥えた蛸。サングラスをかけ、葉巻を咥えながら威勢を張っている顔は、やはりマッカーサーをモデルにしたものなのか？各国の政治に関わろうと、足を八方に伸ばしている。横には昭和天皇が立っている。

『宣伝画参考資料』第五輯には、「米帝国が日本を武装する陰謀」というテーマの特集があり、戦後アメリカが日本を支配するための手段、例えば第二次世界大戦の戦犯を釈放する工作や単独対日講和などをわかりやすく描いている。とりわけ目を引くのは、「日皇裕仁」と記された一枚の絵である（図4）。昭和天皇が六本足と膨らんだお腹の蚤になり、「人民を毒害する日本旗」と記された通りの、バイ菌だらけの日章旗を手を持っている。日本軍の大旧帥を意味する豪華な軍服と落魄した顔とのギャップも滑稽なものだが、米帝資本家の蛸とちょうど横並びになっているので、1945年9月に撮影された昭和天皇とマッカーサーの会見写真を思わせるような構図も見取れる。

昭和天皇を蚤に例えるという極めて辛辣な表現は、今日なら外交問題にも発展するものだが、東西両側の政治的な対立が激化した1951年には、相手国の輿論を考えず

に表現できたのだろう。日本では天皇を醜く描く行為がタブー視されているが、冷戦期の対立国ではもちろんそういう禁忌はなかった。また、東京裁判において、昭和天皇の戦争責任は追及されずに済んだものの、民間からは批判の声が多く、中国共産党も天皇は旧日本軍のトップとして大いに責任があるという見方だったため、この絵は当時の中国における天皇批判のあり様を示すものとして捉えられる。

ただし、六本足や八本足の動物の登場時期は、もう少し前に遡る。1950年9月に上海春明書院より刊行された『新名詞辞典』に、アレン・ウェルシュ・ダレスを「米帝外交政策のキーパーソン」として紹介する箇所があり、そこについているダレスのイラストは、蜘蛛に似ていながら足が十本ある生物になっている。注釈に「陰謀の専門家」との説明もあるので、手足の数は陰謀を企てる手段の多さを意味しているようだ。

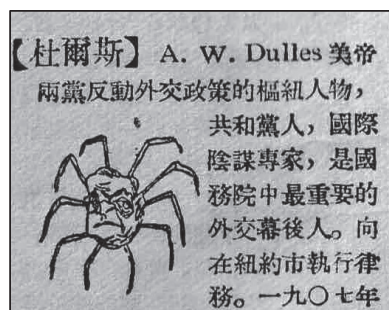


図5 『新名詞辞典』の「ダレス」

ところで、『宣伝画参考資料』の第七輯から第九輯まで、つまり魯少飛が編者を務めた三冊では、動物化の手法がわずかしき使われなくなる。瀧下も指摘したように、魯少飛の得意分野は「解放軍兵士や北朝鮮人民の模範的な図像」⁶であったため、資本主義世界の政治家を対象とした風刺漫画よりも、社会主義の指導者たちの肖像や、人民が心をついて戦う様子を表現することに重心を置いたのだろう。

ともかく、ある動物の既存のイメージを利用し、「敵国」の政治家などをその動物に譬えることによって、政治的批判をわかりやすく表現する手法は、1951年から主に『宣伝画参考資料』の第四輯、第五輯を中心に展開された。華君武も1950年代後半の風刺漫画に動物化の技法を多く取り入れていることから、動物の比喩は同時代の画家と読者のあいだで、ある程度受け入れられていたと推察できる。

1962年、連環画『人民公敵蔣介石』

1950年代の宣伝画に登場した動物の比喩は、1960年代にも様々な形で受け継がれたが、この手法をふんだんに使った作品として、1962年10月に遼寧美術出版社より刊行された連環画『人民公敵蔣介石』を挙げることができる（図6）。

連環画の原作は、陳伯達が1948年に書いた政治宣伝書『人民公敵蔣介石』である。1965年までに十四回も増刷・再版されたこの一冊は、新中国の蒋介石イメージにもっとも影響を与えた書籍といえる。ま



図6 連環画『人民公敵蔣介石』。改編は王淑琴、郭宝、劉旭、李春、絵画は曹光、趙敏、王冠、徐思によるものである。

た、本の表紙絵や挿絵のほか、改編された連環画も、蒋介石をめぐる視覚表現を継承し、新たに創出する役割を担っていた。例えば、蒋介石を描いた1949年版の表紙絵が挙げられる（図7）。尖った長い顔や口髭、陰険な表情を作る濃い眉、坊主頭といった描き方は、1947年に華君武が描いた蒋介石像を踏襲しているものであろう⁷。手足はナチスの鉤十字を形作り、顔もヒトラーのイメージを取り入れたように見える。ただし、鉤十字の方向が逆になっているのは、意図的なものだったかは判断できない。

やや脱線してしまうが、同時期に作られた蒋介石像として、とりわけ吟味する価値のある張仃の漫画についてふれておきたい。1948年に描かれた図8は魯迅を主役とする漫画だが、堂々たる魯迅先生の筆先に怯え、口を締めきなく開け、隠し持っている爆弾さえ投げ出せない蒋介石は、左下に小さく描き出されている。また、国共内戦期の作品と推定する図9に、蛙と化した蒋介石は「経済的危機」「軍事的危機」「政治的危機」という三つの重石に足を縛られ、身動きが取れない中、「五億ドルの借款」の浮き輪にしがみつこうと考えを巡らせている。

張仃は、1933年に丁玲の拉致と監禁事件を表現した漫画を創作したことなどが原因で、1934年4月に国民党憲兵に逮捕され、南京陸軍監獄で三年間服役させられた。それ以来蒋介石を不倶戴天の敵と見なし、新中国成立後、蒋介石批判の漫画を多く創作した⁸。ユニークな表現が多く、今後の考察も期待される画家だと思われる。

ただ、国民党政府は実際全面抗戦を行うためにアメリカに借款を要請したのであり、アメリカが提供された五億ドルの借款、及び一連の経済的援助は抗戦において決定的な意味を持っていた、というのが今日の歴史学における一般的な評価である。図9のような風刺表現は、創作時の歴史的文脈を踏まえて鑑賞する必要があるのだ。



図7（左）陳伯達『人民公敵蒋介石』新華書店、1949年12月。初版は東北書店が1948年7月に刊行した表紙絵、挿絵なしの版本である。

図8（中央）張仃による魯迅像、1948年10月。筆先が向く相手は、アメリカ、蒋介石、封建勢力、日本軍部残存勢力である。

図9（右）アメリカからの「五億ドルの借款」を企む蒋介石。

1962年の連環画『人民公敵蒋介石』の話に戻ろう。この時期は紙質などが改善されたためか、1950年代の風刺漫画よりも滑らかで精巧な線描画が増えたように見える。

この作品はまず蒋介石の出自から述べ、地主階級で金銭至上主義の教育を受けたことや、日本留学を通してファシズム思想の薫陶を受けたことなどを一通り説明してから、偽革命者の蔣がいかなる手段で国民党トップの地位を騙し取ったかを語った。



11 蒋介石这个假革命的两面派，就以这种卑鄙的手段，骗取了人民的信任，步步高升，于一九二六年初，相继窃居了国民党中央委员和国民革命军总监会的职位。



31 在八年抗战中，蒋介石一直是消极抗战，积极反共，干尽了丧权辱国，祸国殃民的大坏事。可是，抗战胜利后，他却想独吞胜利果实。日寇刚一投降，他公然下令不准劳苦功高的八路军、新四军等抗日部队接受日寇投降，而叫他的嫡系部队赶快去抢地盘。



54 蒋介石的鬼把戏被彻底戳穿之后，接着我强大的人民解放军百万雄师强渡长江，一举捣毁了蒋介石反动统治的老巢南京，继而迅速解放了全国大陆。蒋介石的反革命老本输光了，犹如丧家之犬，夹着尾巴逃到了台湾。



62 穷途日暮的美帝国主义和蒋介石所犯下的滔天罪行，激起了台湾同胞越来越强烈的反抗。它们骑在人民头上横行霸道的日子不长了。可是蒋介石妄想反攻大陆，死灰复燃。近一年来，蒋介石在美帝国主义的唆使与帮助下，加紧扩军备战，企图窜犯中国大陆。

図 10 (左上)「蒋介石という偽革命の両面派は、卑しい手段で人民の信頼を騙し取り、トントン拍子に出世し、1926 年の初めに国民党中央委員と国民革命軍総監の座を盗んだ。」遠近法と陰影の使用によって、泥棒を意味する鼠と、権力を象徴する印鑑に質感を持たせている。

図 11 (右上)「蒋介石は常に抗日战争に消極的で反共に積極的だった。しかし抗戦勝利後、彼はなんと勝利の果実を独り占めしようとした。」

図 12 (左下)「蒋介石の悪巧みが露見してから、我が解放軍の百万雄兵は一挙に南京をつぶし、大陸全土を解放した。蒋介石はまるで負け犬のように、ほうほうの体で台湾へ逃げた。」

図 13 (右下)「米帝国主義と蒋介石が犯した罪は、台湾の同胞たちの反抗を招いた。しかし、大陸への反攻を夢見る蒋介石は、アメリカの助けを頼りに、軍備の拡張を急いでいる。」

※原文の字数が多いため、適宜要約しながら日本語に翻訳したものである。

図 10 は蒋介石を「国民党中央委員会」の印鑑にしがみつく鼠として描いているが、こうした鼠の比喩はほかのコマでも使われた。図 11 は、鼠の大将である蒋介石が、国民党の鼠軍を率いて峨眉山を超え、「勝利の果実」に向かって突っ走る様子を描いてい

る。蔣介石は1935年8月に峨眉山を拠点に「軍官訓練団」を設立し、四川での勢力の拡大を図った。しかし、1939年以降、日本軍が四川に対して空襲を行うようになると、蔣介石も峨眉山の官邸で抗戦を指揮せざるを得ない時期が続いた。その一方で、共産党側からすればこれは拱手傍観に過ぎず、抗日戦争が終結する直前に、毛沢東はこの状況について、「勝利まで実力を蓄え、内戦の準備をしていた「委員長」は、これから「下山」するだろう」と語っている⁹。図10と同じように「実力を蓄え権力の座を狙う」陰謀家であるため、額にわざわざ日の丸を貼ってある鼠は肉つきもよく、黒い毛皮もふさふさで、敏捷な動きを見せている。

それとは対照的に、悪巧みが失敗に終わり、解放軍に巢を奪われ、台湾に逃走した図12の鼠は満身創痍であり、毛がほとんど抜けてしまっている。ちなみに、ぽつんと椰子の木が一本だけ立った、狭くて暗い台湾島と、太陽の光（＝毛沢東）があまねく照らす新中国の雄大な土地と対比する構図は、新中国の宣伝画や連環画において広く通用していた。台湾を貧弱な土地として描く意図もあったかもしれないが、新中国ではそもそも台湾についての情報が少なく、画家や文化人たちも台湾の代表的な事物をイメージしにくかったと考える。

さて図13に目を向けると、ひょろひょろした鼠の蔣介石に、ポンプを押してガスを注入している、垢抜けた美男子は、ケネディではないか。「大陸への反攻」を急かしているようだ。当時の中国ではこのような印象を持つ人も少なくなかっただろうが、1960年代のアメリカと中華民国台湾との関係は実に複雑であり、蔣介石とケネディが、新中国とモンゴルの国連加盟問題や、「二つの中国か一つの中国か」の問題をめぐる腹を探り合い、互いへの不信感を深めたのはちょうどこの頃である¹⁰。しかし、政治的宣伝を目的とした連環画は、あくまで「アメリカは台湾を操り、アジアでの覇権を狙っている」というような、冷戦期の新中国メディアの共通した論法に従うことしかできなかっただろう。



図14(左)「蔣介石は、日寇の東北三省と熱河への占領を承認しただけでなく、華北まで日寇のコントロール下に置いた。」
図15(右)「解放軍は遼瀋、淮海、平津の三大戦役を發動し、蔣介石を再起不能になるまで打ちのめした。」

鼠だけでなく、例の動物たちもこの連環画に登場している。図14は、蔣介石が九・

一八事件以降の日本による侵略に抵抗せず、「華北」「塘沽」「上海」を次々と狼化した「日本」の口に投げ入れることを表現している。図 15 には、蛇になった蒋介石が、遼瀋戦役、淮海戦役、平津戦役という三本の剣に刺され、四分分割されてしまったにもかかわらず、まだ諦めきれず、新たに飛んできた解放軍の鋭い刀を睨みつけている。



図 17「米帝国主義の侵略や搾取、蒋介石の暗黒な統治により、今日の台湾はもはや生き地獄になっている。」

図 16（左上）「日寇が降伏した途端、米帝国主義が蒋介石に協力して華北、東北に兵隊を送り、勝利の果実を略奪しようとした。」この絵はインドの「亀本生」に由来し、ラ・フォンテーヌ『寓話』や日本の昔話集などにも記載された「空飛ぶ亀」の話がモデルになっている。鳥の種類について、雁や鶴、鷺など諸説あるが、この絵では侵略者のイメージに合わせるように、鷺として描いているようだ¹¹。

図 16 は、汗だくの二羽の鷺が口で竿を支え、一匹の亀が辛うじて落ちないようにその竿をくわえているが、手にあるのは「東北、華北へ進軍せよ」と書かれた旗である。日中戦争後、中国全土の支配を目論んだアメリカと蒋介石のことを指している。

手足の多い動物はやはりここにも姿を現している（図 17）。蒋介石が化けたのは蜘蛛なのか何なのか、手足合計十二本もあるため、尋常でない食欲さの持ち主ということが読み取れる。手に掴んでいるのはレザービリーや手錠、鞭、警棒という四種類の武器と、そろばん、高利貸と「苟捐雑税」（雑多で過酷な税金）の帳面であり、相手をしているのは痩せこけた労働者である。気の毒な労働者は、左手で米一粒入っていないボロ茶碗を見せながら、右手はすでに首吊り用の縄にかかっている。

以上のように、新中国の蒋介石像は陳伯達の『人民公敵蒋介石』によって方向付けられ、漫画と連環画によって具体的に視覚化されていた。連環画に加えて、新中国の映画や語文教科書においても、明示的あるいは暗示的に、蒋介石は陰険かつ凶悪な独裁者として表象されていたため、1987 年生まれの筆者も、幼少期に蒋介石を世の中一番の悪者だと認識し、友達と喧嘩になると、「お前は蒋介石だ」「お前こそ蒋介石だ」という言い合いをしばしば行ったものである¹²。

文革宣伝画と動物

動物の比喩は文化大革命期においても継承されていく。紅衛兵や革命委員会などの

組織が全国各地で宣伝画の創作活動に取り組み、「走資派」（共産党内の資本主義に傾いた人）や「反革命」、「蘇修」（ソ連修正主義の思想を持つ人）を批判する漫画を次々と産出した。南雲大悟は、文革期の漫画における劉少奇描写を分析し、とりわけ劉少奇を「バケモノ」として描くものを多く取り上げた。鼠、ガマガエル、あるいは蛾、サソリ、カマキリ、クモ、蝇、シラミなどの昆虫類、いわば一般におどましいイメージを持たれている動物と劉少奇とを合体させた表現が多く、それによって不気味かつ滑稽な雰囲気を漂わせているという¹³。今日に至っては、文化大革命の狂気をリアルに伝えてくれる資料になったといえよう。劉少奇のほかに、批判的となりやすいのは、やはり趙紫陽や陶^{とうちゅう} 鑄、鄧小平など、経済と生産を重視する「走資派」である。そうした宣伝画の表現手法も、基本的に南雲論文によって説明された通りであるため、ここでは図像の例示に留めておきたい。なお、図 19～20 は香港中文大学「文革期間の広州諷刺宣伝画 1966-1967」データベースに掲載されているものである。



図 18 (左) 紅山文化大革命闘批改「趙紫陽批判漫画」1966 年 11 月。

図 19 (中央) 「陶猪野性図」東風反隊批陶漫画專刊、1966 年 12 月。「猪」は名前の陶「鑄」をふまえている。

図 20 (右) 『造反戦報』画刊、1967 年 5 月。「白猫であれ黒猫であれ、鼠を捕る猫はみんないい猫」と語る鄧小平に、猫は「妙、妙、妙」（「実に素晴らしい」）と返答する。

連環画「復活した日本軍国主義を打倒せよ」

いかなる刺激的な手法でも、固定化してくるとマンネリ化するものである。そこにきて 1969 年に劉少奇が死亡したことで、劉少奇をめぐる風刺漫画のブームも沈静化した。しかし、連環画は常に新たな題材に巡り会えるものであり、1970 年からは、「日本軍国主義」が新たな対象となって連環画に登場した。

1970 年前後の日本では、大規模な安保闘争が展開されたにもかかわらず、第二次安保条約の延長が宣告され、佐藤栄作内閣が政権を取り、1972 年まで勢力を伸ばし続けた。1970 年 11 月 25 日、作家三島由紀夫が「楯の会」のメンバー四人を率いて自衛隊市ヶ谷駐屯地に入り、憲法改正のためのクーデターを呼びかけたのち割腹自殺をした、

いわゆる三島事件は、世界中を騒がせた。1970年11月29日の『人民日報』もこの事件を大々的に報道し、三島由紀夫の語った「憲法の改正」と「建軍の本義」がまさに日本軍国主義復活の象徴であると主張した。その直後、「三井、三菱等の大財閥がアメリカ帝国主義の庇護のもとで復活し、軍事化を推進している」、「自衛隊がすでに陸海空の二十八万人を有する軍隊になった」、「佐藤政府がさらに大規模な軍備拡大の計画を実行している」、「三島由紀夫事件を背後で支えたのはまさに佐藤政権である」、「宮本修正主義集団は疑いもなく米日反動派の共犯者である」など、中国共産党の公式見解も示され¹⁴、三島由紀夫批判のみならず、日本の右翼化を導く財経界や佐藤政権を批判するキャンペーンが中国で展開された。

そうした中で、「打倒復活的日本帝国主義」（復活した日本軍国主義を打倒せよ）と題した連環画が1970年第27期の『工農兵画報』（『富春江画報』の前身）に掲載された¹⁵。この作品はA4見開き一ページの上半分を占める十二コマの絵によって構成されている。内容は『人民日報』の見解そのものだが、連環画で政治問題を表象する際に、国家体制や外交問題など、抽象的かつ規模の大きい内容をいかにシンプルな線描でわかりやすく伝えられるかが、作者の腕の見せどころである。では、作者の林尽染はどのように工夫したのか。

作品の一コマ目は、「軍火工業」の煙突を持ち上げようとしている二人の男が主人公になる図21である。アメリカ人らしき人物はニクソンで、もう一人は三井か三菱の財閥のトップあたりだろう（「牧田天皇」とも呼ばれた牧田與一郎か？）



図21（左） 「旧日本ファシズム軍部の後継者である大財閥たちは、米帝とグルになって日本をコントロールし、大規模な軍備戦のために、お膳立てをはじめている。」

図22（右） 「軍国主義勢力が再び日本の軍政権力を手に入れた。佐藤内閣の六割以上は旧ファシズム官僚で、日本反動的軍隊の高級幹部は、ほとんど全員旧ファシズム幹部である。」

「岸信介」と「佐藤（栄作）」が「旧法西斯官僚」（あるいはその亡霊？）と握手を交わす様子を描いた図22は、これと同工異曲の一枚である。旧ファシズムの四人は特定できず、右から二人目は東條英機のように見えるが、確定的な要素が示されていない。頬ひげと口ひげの二人はやや古めかしい雰囲気だが、もしかすると旅順攻囲戦を

指揮した乃木希典と、日清戦争時の海軍大将、伊東祐亨（ヒゲが両側に跳ね上がる特徴から）あたりだろうか。それにしても服装が時代錯誤である。あるいは、複数の人物のイメージを融合してこの四人を描いた可能性も考えられる。

1960～70年代の中国メディアが米帝と日本を批判する際に、宮本顕治を中心とした「日修」（日本の修正主義）にも必ず言及していた。この作品にも佐藤栄作と宮本顕治と思われる人物が、軍国主義の亡霊を背景に「和平」と「憲法」のうちわを持つコマがある（図23）。佐藤（の自民党政府）と宮本（の共産党組織）が表向きは和平と新日本憲法を掲げているが、それは軍国主義の復活を覆い隠すための小細工にすぎないと語りかけているようである。着物と下駄といった伝統衣装は、二人の身に残された「封建的残滓」を意味するだろう。



図23 宮本と佐藤

動物の比喻ももちろん欠かせない。アメリカを中心とする資本主義陣営の関係性を表した図24では、鷹の姿をした佐藤栄作が銃を抱えるニクソンの肩に乗り、両側で跪いているのは犬の姿をした朴正熙と蔣介石である。ニクソンに媚びへつらう朴と蔣と比べると、佐藤は威勢良く遠方を眺めている。日米安保によってアメリカとの結束を強くし、アジアでの覇権を争う自信が身についたからであろう。しかし、拠り所としているニクソンはというと、泥沼のベトナム戦争から抜け出せず、疲弊し果てている。



図24 米、日、韓、台

1972年以降の中国で親中的政治家として人気を集めた田中角栄とは対照的に、1970年前後の中国における佐藤栄作批判は甚だしいものだった。この連環画は佐藤を中心に描いており（12コマの中の8コマ分）、あらゆる比喻表現



図25 武士（道士？）の衣装を着た佐藤

を用いてその「軍国主義復活の企図」を暴いている。図25では、武士の衣装を着た佐藤が、右手で剣（「軍国主義宣伝」の剣）を握り、左手でひょうたんを高く持ち上げ、書籍、テレビ、ラジオ、蛇の形をした映画フィルムをふりまくと同時に、「忠君愛国」「武士道」「天皇至上」などの文字も放出している。メディアのコントロールと情報操作を風刺する一枚になっている。



図 26 「日本は新たな植民地体系を築くために、独占資本を東北アジアと東南アジア、および他の地域に進出させ、各国の人民に対する無残な搾取を行っている。」原材料を狙っている蜘蛛は、「利潤」と「石油」も忘れずに握りしめている。



図 27 佐藤栄作

定番の描写を行なった図 26 も挙げられる。四角い顔と大きい目、強硬そうな表情、一糸不乱に分けた髪、蜘蛛に化けた人間はやはり佐藤栄作である。

ここまで見ればわかるように、1960～1970 年代の政治宣伝画と連環画が「敵」を動物に見立てて罵倒する場合、使われる動物のイメージや表現手法は 1940 年代末から 1950 年代初頭の漫画と大きく変わらず、基本的に『宣伝画参考資料』や華君武などの方法を踏襲している。しかし、いいかえれば、新中国成立当時に画家たちが作り上げた手法は、長きにわたり様々な題材に応用できるものであり、各時代の大きな物語に取り込まれ、蒋介石や佐藤栄作といった顕著な個性を持つ人物に用いられることによって、連環画作品に新たな生命を吹き込むようなものであった、という見方もできる。

風とともに去りぬ

「敵国」の政治家を遠慮なく罵倒する時代もやがて終結を迎える。1972 年の日中国交正常化、米中国交正常化により、中国と資本主義世界との関係が改善され、ニクソンや田中角栄などの政治家に関する報道が好意的になるにつれて、本論で見てきたような動物の比喻も、出版メディアから徐々に消えていった¹⁶。文化交流が盛んになり、アメリカや日本のイメージは、現代の都市生活を反映する文学作品、映画作品から形成されるようになった。1980 年代の中国では、日本といえば高倉健や山口百恵などの美男美女が思い浮かぶ時代がやってくる。『人民公敵蒋介石』と『復活した日本軍国主義を打倒せよ』といった類の図像表現はやがて歴史的な産物になったと思われる。だからこそ、冷戦期という特殊な時代における「他者への想像」を語るものとして、記録されていくべきだろう。

-
- ¹ 毛沢東「満江紅・和郭沫若同志」『毛主席詩詞』1963年12月。
- ² 主に瀧下彩子の「人ならざるモノへの視線——華君武の人民風刺漫画」(『連環画研究』第7号、2018年3月)と「魯少飛 漫画人生指南——戦後中国と漫画作家たち」(『連環画研究』第6号、2017年2月)、南雲大悟の「文革期の漫画に描かれた劉少奇」(『連環画研究』第7号、2018年3月)が挙げられる。
- ³ 瀧下彩子、前掲注2「人ならざるモノへの視線」。
- ⁴ 瀧下彩子、前掲注2「魯少飛 漫画人生指南」。
- ⁵ 方成、鐘靈『宣伝画参考資料』第4輯、人民美術出版社、1951年2月。
- ⁶ 瀧下彩子、前掲注2「魯少飛 漫画人生指南」。
- ⁷ 瀧下彩子、前掲注2「人ならざるモノへの視線」。華君武による蔣介石の形象が、その後の漫画家が蔣介石を描くときのスタイルになったことが指摘されている。
- ⁸ 李兆忠「張仃絶筆〈焚書坑儒図〉」『収蔵』2018年第1期。
- ⁹ 毛沢東「抗日戦争勝利後の時局と我々の方針」1945年8月13日。『毛沢東選集』第4巻収録。
- ¹⁰ 前田直樹「国連中国代表権をめぐる米台関係——ケネディ政権と蔣介石政権」『広島法学』2009年10月。
- ¹¹ 湯谷祐三「「亀が空を飛ぶ話」の生成と展開——敦煌の寓言詩に発して『今昔物語集』に及び、キルヒャーの『シナ図説誌』に広がる」(『同朋大学仏教文化研究所紀要』2002年)を参照。
- ¹² 2000年前後、書籍自体も豊富になり、またネットメディアの普及により、国共内戦や蔣介石に関する情報も多様化したため、やっと脳内にあった化け物のような蔣介石像を更新することができた。例えば劉毅政の『宋美齡評伝』(華文出版社、2000年)は、宋美齡と蔣介石の人物像を多面的に理解するために重要な書物だった。ただし、筆者は四川省の山奥の辺鄙な地域で育ったため、情報の摂取がやや遅れており、都市部の若者はもっと早くからそうした情報にふれていたのかもしれない。
- ¹³ 南雲大悟、前掲注2。
- ¹⁴ 「号召日本人民團結起来、打倒美帝和日本軍国主義」『人民日報』1970年12月1日。
- ¹⁵ 『工農兵画報』の掲載直後、『復活した日本軍国主義を打倒せよ』は合肥無線電四廠幻灯連によって幻灯にも改編された。日付は不詳である。幻灯とは、紙芝居よりやや進化した、大衆宣伝の際によく使われたメディアの一つである。「種板」と呼ばれるガラスの板に、モノクロあるいはカラーの絵が塗られたものであり、ライトを照らせれば画像がスクリーンや壁に映される。武田雅哉は『中国のマンガ〈連環画〉の世界』(平凡社、2017年2月)において、幻灯を上映する係員を題材とした『農村放映員』というタイトルのポスターを紹介している(218)。そのポスターは、「放映員」が両手にかまえたカスタネットで伴奏しながら歌い語り、観衆にむけて宣伝活動をしていると思しい様子が描かれている。
- 幻灯『復活した日本軍国主義を打倒せよ』は、連環画の内容を二十コマまで増やし、モノクロの図をカラーに作り変えている。連環画の絵を書きうつしたものの以外、ソ連兵がチェコ(捷克斯ラ夫)に侵攻する場面など、ソ連批判の内容も加えられた。ただし、幻灯の資料は手に入りにくいため、現段階では内容の考察が困難である。
- ¹⁶ 一方、ネット上では新たな表現手法が生まれる。一例を挙げよう。日本の小泉純一郎元首相は2001年から2006年の在職期間中に靖国神社を参拝し、そのことは中国では強く批判された。その際、中国のネットメディア上では、小泉を名前と同音の「小犬」に見立てたイラストや合成写真が一時的にブームとなった。